小説の中にみる千歳

千歳にゆかりが深い作家といえば、長見義三（おさみぎぞう）と畔柳二美（くろやなぎふみ）があげられる。長見は、早稲田大学在学中から本格的に文芸の道に入り、卓越した感性と瑞々しい情感でアイヌをはじめ人々の哀感を繊細な文章で表現した。長沼町で生まれた長見は北海道を題材とした作品が多く、昭和14（１９３９）年に発刊された「姫鱒」で芥川賞候補となった。戦後は千歳に居住し米軍基地で通訳を務め、千歳の郷土史研究や文芸活動の中心的役割を担った。51年に発刊した「ちとせ地名散歩」は、本市史編さんにあたって貴重な資料となっているほか、58年に発刊した『増補千歳市史』では執筆・編集の中心となった。ほかに千歳で書かれた自伝「白猿記」は小説を越える文学作品である。60年に市功労表彰（教育文化）、平成２（１９９０）年に北海道文化賞を受賞した。

畔柳は、父親が働く現在の市内水明郷にあった王子製紙千歳川第一発電所の社宅で生まれ、幼少期を過ごした。その後、父親の転勤により虻田郡狩太村（現・ニセコ町）へ移り、これら少女時代を過ごした大正から昭和初期の北海道の自然や人々の生活を舞台とした自伝的作品を多く書き、昭和26年に発表された「川音」と「限りなき困惑」で芥川賞候補、28年の「姉妹」は毎日出版文化賞を受賞し映画化された。

この２人が千歳を舞台として執筆した小説のほか、アイヌを主人公として和人による差別と和解などを描き、千歳をロケ地として映画化され当時の街並みや建物が映る「コタンの口笛」など、千歳が登場する小説をいくつか紹介する。

「白雲木」　長見義三　昭和43（１９６８）年　北方文芸刊行社『北方文芸』

平成５（１９９３）年の長見義三作品集「別れの表情」に収録された。

町をぬけ、Ｂ駅の方向へ折れて、雑木林の中のヤマボウシを探しに行った「私」は、そこで二世のサカタを髣髴（ほうふつ）させる男に出会う。10年ほど前の記憶が蘇った。その頃の私は地層や粘土に凝っていたが、もっと熱意をもって先史遺跡を探しまわっていた。

10年前の５月、私は貝塚の対岸の丘陵の端にある穴居跡群を残照の中で試掘していた。縄文土器片を手に戻る途中、双眼鏡を持った老人に会う。この後、二世軍属のサカタによるピストル殺人死体遺棄事件が発覚した。サカタがマネージャーをしている下士官クラブに勤務していた通訳の須藤がサカタに殺されていた。サカタが須藤から借りた15万円の返済を迫られ、口論からかっとなって車の中で射殺し、市郊外の山沿いの路辺に埋めたという。

美々の雑木林で出会った老人は須藤の父親馬吉であった。サカタのものらしい車が貝塚の地帯に入ったのを見たと聞いた馬吉は激しい雨の翌日、息子の遺体を発見する。事件後、サカタはいったん釈放されるが、刑務所へ送られる。一度サカタの妻に会ったことのある私は「日本人の彼女はサカタの出獄を必ず待っているだろう」と思う。ヤマボウシを探していた私は間違えて、それが白雲木であることを馬吉の庭の木から知るのだった。

私は森林組合の事務所へ向かった。川に平行した道を下っていくと、グリーンベルトと呼ばれる大通りがある。（略）すぐ傍らの家の庭に（略）私が手に持っている枝と全く同じその木が豊かに大きな葉を風にそよがせながら真っ白に花を咲かせていた。花盛りには遠くから白雲のように見える、というその名の由来も、なるほどであった。この木は間違いなく白雲木なのだと確信した。

「ケール中尉とともに」　長見義三　平成11（１９９９）年　新宿書房

昭和20（１９４５）年10月、長見は米軍基地の通訳としての辞令を受け取る。「ケール中尉とともに」は、基地での体験がもとになっている。

物語は20人余りの孤児たちを進駐軍の将校がクリスマスに招く場面から始まる。作者が反映される南はＲ・Ｔ・Ｏ（鉄道輸送隊）のケール中尉付き通訳。Ｒ・Ｔ・Ｏは毎日駅に詰め、発着の貨車、客車を掌握、迅速な輸送をはかる仕事である。敗戦直後の旅客にも厳しい乗車制限があった。ケール中尉は入れ替え時間の節約と作業能率を上げたいと考え、使われていない海軍のディーゼル機関車を修理して使おうと提案する。修理担当には南の紹介で葛西という男が雇われるが、失火から計画も失せてしまう。作品のクライマックス、火事の場面は、関わった人々のそれぞれの哀しみが描き出され、感動的である。登場人物、事件とも一切虚構であると作者は記している。ただし、ケール中尉は実在の人物。敗戦時の復興に尽力する温かい人間像が描かれている。多くには知られない基地内の様子、働く者の姿を描いた、歴史的資料としても貴重である。マニュアルに縛られ、冷酷ともとれる連絡官。ＢＣ級戦犯の追訴を恐れる同僚の通訳などの人間像がリアルで温かく、悲しみの目差しで描かれている。

登場する「駅」は千歳駅のことである。昭和23・24年頃の作品。長見の自伝的半生記「白猿記」にはこの小説の存在が記されているが、没後、未発表作品として出版された。

ケール中尉は南をともなって駅へ着くと、駅長や助役たちと挨拶を交わしたあと、最初の用件を南に話した。

Ｋ－駅よりも大きなこの駅でさえ、道外は日に二枚、近距離でさえ、五十枚ほどしか売れぬことになっていた。旅客は朝七時売り出しのその切符を買うために、二時、三時から立ち並ぶ。

「山の子供」　畔柳二美　昭和31（１９５６）年　現代社

畔柳二美が大正時代に千歳市水明の王子製紙第一発電所で過ごした幼少時の自伝的回想である。作品の冒頭から全編を通して登場する朝鮮の青年「テイさん」は子供たちにまとわりつかれながら毎日庭園のクローバーを刈っている。社宅に行商にくるアイヌの姿など、差別と倫理のはざまに揺れる大人たちの姿を温かいユーモアとヒューマニズムで綴られている。

当時の千歳の様子は書かれていない。子供たちが言う町は苫小牧のことであり、ピーポーの汽車－山線鉄道－は苫小牧の貯木場から丸山のＴ字分岐点までを往復していた。

一日に幾度も、子供たちはテイさんのまわりに集まり、笑いころげては散ってゆく。テイさんはしかし、一度も怒ることなく、子供たちをうるさがりもしなかった。

「星座」　有島武郎　大正11（１９２２）年　叢文閣

「或る女」をしのぐ大作が意図されながら行き詰まり、第１部のみが残された。舞台は明治30年代の札幌を中心とし、10月下旬から11月にかけての初冬、白官舎に生活する札幌農学校の学生たちの懸命な姿が、生き生きと丁寧に描かれている。白官舎は開拓使が下級官吏向けに建てた白ペンキ塗りの洋風建物で、民間に払い下げられていた。有島縁の札幌独立教会も明治14（１８８１）年に仮の会堂にしていた。

「星座」には多くの人物が描かれ、中でも星野、園、渡瀬の３人が一段と輝いている。学生たちは明治30年代の星だったのである。学生のリーダー的存在の星野清逸は千歳川の畔、インディアン水車の約５００メートル下流に家があり、父母、孵化場で働く弟、小樽へ奉公に出ている妹の貧しい一家だった。

清逸は病の不安を抱えながら、学問への情熱を抑え難く、上京を夢見ていた。清逸には実在のモデルがいた。三笠出身の秀才、星野純逸。明治29年に札幌農学校で有島に出会っている。やはり結核に罹っており、31年東京麹町で客死。著書に「折たく柴の記」、「政談」などの思想論がある。清逸の父が、3里隔った島松の中島（稲作に成功した中山久蔵と思われる）の養子に、学費の工面に出かける場面もある。

作中のインディアン水車のあった場所は、当時1年だけ設置されたという、現在の千歳橋の上流、青葉公園の下と思われる。

裏庭のすぐ先を流れている千歳川の上流をすかしてみると、五町ほどの所に火影（ほかげ）が木叢（こむら）の間を見え隠れしていた。瀬切りをしかけてあって、川を登ってくる鮭がそれにすくい上げられるのだ。ふ化場の所員に指導されてアイヌたちが今夜も夜通し作業をやっているに違いない。

「活火山」　火野葦平　昭和25（1950）年　新潮社

青井の若旦那と呼ばれる九州島原の詩人で作家の青井光之介は、雲仙の高原を酪農天国にしたい夢の実現のため、北海道の酪農の視察をする。視察を終え、友人の赤田とともに支笏湖に立ち寄る。2人は岩上五郎というアイヌの船頭の案内でチップ釣りに出かけ、シシャモナイまで案内される。突然激しい雨に襲われ、造材の飯場に避難させてもらう。光之介はそこで、岡崎桐子という女子大生に出会う。桐子は作曲も手がけ、子熊を飼っていた。光之介は純真で美しい桐子に惹（ひ）かれていく。光之介の詩、「その上の大いなる谷　君知るやかの支笏湖　みずうみの水青ければ　ヒメマスのなげきも青し　…」に桐子は作曲し、ヴァイオリンで弾いた。一方、岩上五郎は桐子に密かに恋していた。光之介の出現は3人の悲劇の始まりとなる。

光之介は強いられている政略結婚を受け入れざるを得ない状況にあった。その上に網膜色素変性のため失明寸前の不安に陥る。桐子は出生の秘密を岩上五郎に知らされ、光之介との交際も絶ち、岩上五郎とともにサーカスの一座でテシ・カオルと名乗り、熊使いとなっていた。偶然桐子の一座は島原に行き、桐子はそこで光之介原作のドラマ「湖の曲」を光之介が自ら語るのを聞く。ドラマの中のテシ・カオルは支笏湖に身を投げて死んだ、と。光之介が、桐子は死んだと思っているよりも、死ねと命じているように桐子には聞こえてきた。長崎興行のサーカスに熊を使うカオルという女がいることを知り、失明した光之介は出かけていく。桐子は綱渡りの空中で「湖の曲」を弾きながら青酸カリを飲み、落下する。

（あれが、タルマエ火山だな）

二つの峯を持った山がそびえ、左側のひくい山の頂上に、こんもり盛りあがったドームがあった。湖の光線に光りながら、白くむくむくとわきあがる噴煙は、そのドームの左胴から風にしたがい左へ左へとたなびき流れた。

「夏子の冒険」　三島由紀夫　昭和26（1951）年　朝日新聞社『週刊朝日』

昭和26年8月から11月まで『週刊朝日』に連載。12月、朝日新聞社より刊行される。

20歳の夏子は、理想とする情熱的な男性など1人もいないことに絶望し、突然、修道院に入ると言い出す。祖母、伯母、母に付き添われ、函館付近の修道院に入るために東京を発つ。駅のホームで猟銃を持った瞳の輝く青年を見かける。連絡船の中でその青年、井田毅と言葉を交わした夏子は毅に興味を持つ。

毅は3年前、千歳の蘭越コタンでアイヌ一家に育てられた和人の娘秋子と出会う。秋子に強く惹かれた毅は3年後には結婚しようと考える。3年を待たず、秋子は人食い熊と恐れられている「四本指の熊」に殺されてい

た。毅は秋子の仇討ちに行くところだった。

毅の情熱にあこがれた夏子は、強引に同行することになる。白老、支笏湖と熊を追った毅は、見事仇討ちを果たす。仇討ちに成功した暁には、毅と夏子は結婚する約束をしていた。しかし目的を果たした毅には、出会った時の情熱はどこにも見当たらない。どこにでも、掃いて捨てるほどいるただの青年になっていた。

失望した夏子は、やはり修道院に入ろうと思うのだった。

菊蔵は、

「わっ！」

と叫んだ。すると熊は酷くすばやい運動をした。その大きなだぶついた體が、野球の投手のようにくるりと身をひねって向きを変えると（略）

町のまん央をまあたらしい舗装道路があざやかに走っていた。ジープがとおる。高級車がとおる。時々ちかくの飛行場を飛び立った戦闘機が爆音すさまじく急降下してみせて、道路に切り紙細工のような影を切り抜いた。

「北海道千歳の女」　平林たい子　昭和27（1952）年　『小説新潮』第6巻第5号

「北海道千歳の女」は昭和27年12月、『小説新潮』第6巻第5号が初出である。本著は、マイク・モラスキー編「街娼」に収録されている。

昭和28年を中心に起きた第2のパンパンブーム。在日米軍基地周辺の町における売春問題、その産物である混血児問題、地元の日本人の子供たちの教育環境への悪影響などがジャーナリズムの世界でクローズアップされ、国民の注目を集めた。

作品では、早造、つま子夫妻が九州から千歳に引っ越し、米軍相手の土産物店を営んでいる。つま子は訳ありの過去を持っていたが、真面目な妻になろうと働いた。若く、美しいるり子は金持ちの中年夫と優雅に暮らしているが、好奇心も性欲も旺盛で、何人もの黒人兵と、金銭を受け取らないことをモットーに浮気を繰り返す。ファニーという女性は、作中パンパンの代表として登場するが、最もまともな女性に見えてくる。つま子はるり子とは反対に夫と寝る度に金を請求するようになる。ファニーと接するうちに、夫人と娼婦はどう違うのか自問していた。やがて、るり子は黒人兵の子供を妊娠する。病院に働きかけて代わりの赤ん坊を用意させ、出産と同時に赤ん坊を取り替えてもらう。平然と夫を騙し続けるるり子を、つま子は批判的に思い始めるのだった。

北海道の札幌から月寒（つきさっぷ）をとおって、恵庭をとおって、苫小牧に向けて国道を車で四五十分。土埃を帯のようにひろげてはしって行くと、前車ののこして行った土埃の中に汚い柿屋（こけら）根の町が現れる。航空基地のある千歳である。（略）たとえばレストランと言っても扉口のほかにはたて三尺によこ六尺のあいた小窓が一つ外から見えるだけである。

「コタンの口笛」　石森延男　昭和32（1957）年　東都書房

第1部「あらしの歌」、第2部「光の歌」の2部構成。アイヌの少年ユタカと姉のマサ、貧しい労務者の父イヨンの生活がリアルに描かれている。姉弟は民族的な差別の中で希望を失わずに、担任の中西先生、絵の谷口先生など善意に満ちた人々の理解と励ましを受けながら、マサが中学卒業、ユタカが中学2年になるまでの1年間が丁寧に描かれている。酒浸りの父親が子供たちのために再出発をはかり、冬山の造材の仕事に出かけ、事故であえなく死亡する。父の亡き後、姉弟の健気な生き方を理解し、支援する人々によって、2人の希望の光が暗示されて物語は終わる。

登場する「チクサ橋」は千歳橋と思われる。

けたたましい音響が、あたりをたたきつけました。四キロほどはなれた飛

行場で整備されるジェット機の爆音です。

町のチクサ橋のところまできました。（略）「マサチャンの家は？」「もう少し行って、西へまがるんです。」

昭和35年に公開された映画では、支笏湖を背景に絵を描くシーンや市街中心部（仲の橋通り）、千歳高校のグラウンドや旧校舎など、撮影は主に千歳市内で行なわれ、多くの市民エキストラが協力している。

「湖の裁き」　大西雄三　昭和34（1959）年　知性社

シララはシコツメムに近い胆振コタンの酋長の娘。シコツメム周囲の山にはシコツヌプリという火山も聳えていた。

ある時、飢饉のため飢えに苦しむコタンに食糧を分けてほしいと、日高コタンからオッケニという若者が訪れる。オッケニはシララの父ションコの兄で日高コタンの酋長シクフの息子だった。エカシらの協議の結果、食糧は分けてもらえず、オッケニは失意のうちに日高へ帰る。

次の冬、オッケニが再び食糧を乞いにやってくるが、胆振コタンはオッケニらをだまし討ちにしようと企てる。オッケニに心惹かれるシララは、オッケニを逃がし、妻になりたいと打ち明ける。

日高コタンは胆振コタンへ攻めてくる。

胆振コタンは凍ったシコツメムにコタンがあると見せかけ、湖の一部の氷を割っておき、日高コタン軍を溺れさせる。シララはオッケニに味方し、共に湖に果てるのである。やがてシコツヌプリが大噴火を起こし、膨れ上がったシコツメムの水に胆振コタンは飲み込まれてしまった。

大地が大きく裂け、根元から空中に舞い上がる樹木、噴き上げられて落下する岩石、ションコの身体も、木の葉の風に舞うように、空中に翻弄されていた。

やがて、何処からともなく水がひたひたと湧き上がり、凹地を埋め、チセやプーを埋め、胆振コタンを満たして行った。

長い時をとらず、胆振コタンは巨大な湖と化したシコツメムの中に没して行った。

「千歳の女」　大西雄三　昭和34（1959）年　知性社

故郷の沼の端から家出したハナは万里子と名乗って、千歳のオクラホマ時代といわれる昭和26年頃の3年間、オンリー生活をしていた。相手のリナルディは万里子には一言も告げず、移動で千歳を発ってしまった。恐らく朝鮮戦争へ配されたのであろう。万里子は悲しみと怒りと明日からの生活を考えなければならなかった。

やがて万里子は徳山という老年の朝鮮人の世話になる。徳山は65歳とも70歳ともいわれていた。精力的なG・Iや黒人たち、ましてリナルディと関わってきた万里子は、徳山に満足することはできなかった。徳山はビヤホール、クラブハウス、ヒロポン、闇ドルと手広く儲けていた。彼の店で万里子はママと呼ばれていたが、空しさを埋められないでいた。

ある日、万里子は徳山が隠している大金を発見する。知り合ったG・Iと組んで盗む計画を立てた。

その日、G・Iたちの部隊が秘密兵器を輸送するため、小樽経由で仙台へ向かう。万里子も夜の駅からその部隊を追って千歳を抜け出す。進駐軍用のダイヤ、11時20分発の快速列車で札幌に向かい、札幌から小樽に出て埠頭で落ち合い、金を3等分して、万里子は陸路で仙台に行き、2人と今後を相談することになっていた。

基地のG・Iたちは始終移動のため出入りしていた。朝鮮帰りもいれば、歴戦の第二次大戦から引き続きの暴れん坊たち、本土から直輸入の年少部

隊、それに黒人兵、女たちは相手次第で（略）

十一時五分前、万里子は裏手から店を抜け出した。駅まで十分はゆうにかかる。札幌行きの改札が始まるまで、駅前の広場の暗闇にイんでいた。

「コタンの犬」　竹岡準之助　昭和37（1962）年　早稲田公論社『早稲田公論』

昭和30年代、千歳川で真珠の養殖を試みた人がいた。そこで働く夢を描く青年「私」の体験をもとに、1匹の犬との関わりを哀感をもって綴られている。作者竹岡は早稲田仏文科で三浦哲郎と同人誌の仲間であった。中に三浦哲郎が紹介文を載せている。

真珠の養殖は水温の低いこともあって、思うように進展せず、窮地に追い込まれていた。場長の氷室は湖の姫鱒の冷凍販売を企てるなど、借金返済の当てを捜しに奔走していた。姫鱒が縁で知り合った札幌の食品会社次長、阿賀にアイヌ犬（北海道犬）を世話してほしいと頼まれる。氷室と私はコタンの老人から1匹の犬を譲ってもらい、阿賀に届けた。犬は申し分のない、優秀で健康な子犬だったが、札幌までの車中で酔ってしまい、急激な環境の変化から、すっかり元気を無くしてしまっていた。それでも2人は阿賀から代金の5000円を受け取る。その金からいくらかの返済と、家族の食糧を求め、老人には2000円を犬の代金として渡した。老人には憤りもあったようだが、氷室の窮地を知っているのか「あんたらのことだから、仕方ないべ」と苦しそうに言うのだった。

その後、犬はやはり都会に馴染めず、本来の闊達さは戻らなかったようだ。姫鱒の商いも、道具を揃えることができず、いつの間にか消えていた。

私はここへ来てから2年後、養殖場を去る決意をする。犬が未だ都会に馴染めないでいることを知った私は、犬の哀しみが思ったより深いことを心に痛く思うのだった。

山里はすでに雪が降りていた。荒漠とした山懐のあいだをせわしく蛇行して流れる黒い川面のほかは、白一色に包まれていた。さいしょ、私は、養殖場に一人の従業員もいないことをふしぎに思っていたが、べつに気にもとめなかった。

「蝕まれた愛」　夏掘正元　昭和38（1963）年　集英社

『新婦人』に昭和38年1月から12月まで1年間にわたって連載された。

江見律子は札幌の酪農会社社長、沢見淳一郎の娘。カトリック信者の家に育つ。母の死後、父に愛人がいると、父の会社の軽薄な青年社員、鷹原洋司に知らされる。相手は鷹原の姉だという。律子は父と愛人、それを知らせた鷹原の泊まる支笏湖のホテルへ向かった。「処女が純潔だなんて、実は不潔な話さ」と言った従兄の間島圭介の言葉に揺れていた律子は、父への復讐、処女性への復讐のように鷹原に自分を与える。自分自身として活きるための苦々しい儀式であった。「充足することのない、ささくれた性の不安感が主調音」となった一編。

支笏湖への道は、もうすっかり晩秋の色に深く包まれていた。札幌を正午に発って、国道をほとんど揺れもせず一路南下した車は四十分後千歳の街に入ると急に右に折れ、人家のかげ一つ見えない原始林の道に……。

「北の旋律」　飯塚朗　昭和42（1967）年　現文社

一川一は北大の中国文学助教授として赴任する。北大では、独身者には住宅がなく、妻帯者にはアパートが提供されるため、さち子という元バレリーナを1ヵ月間の契約で結婚して冬の札幌に来る。札幌での生活が大半であるが、クリスマスイヴの熱狂を避けて訪れる支笏湖丸駒温泉の描写、温泉の物語、露天風呂など昭和40年頃の様子が40ページ余りに書かれている。

千歳はむかし蝦夷の六大都市の一つであったといわれているが、この間まではアメリカ駐屯兵とパンパンの町として知られていた。いまは駐屯の兵も去って、パンパンも散ったが、けばけばしいペンキ塗りの（略）家がまだ散見できた。…丸駒温泉と旗をなびかせた渡船のエンジンがかかった。丸駒温泉までおよそ八キロ、尖った恵庭岳の東南の麓をめざして、カモの群れている湖面を、船は飛沫をあげてまっしぐらに進んだ。

「晩秋」　丹羽文雄　昭和43（１９６８）年　朝日新聞社『週刊朝日』

昭和43年、『週刊朝日』に連載。57回に帯子が型染めの展示会のあと、晩秋の支笏湖を独り訪れる。帯子は2度の結婚に破れ、染色一筋に生きようとしていた。支笏湖のホテルでかつて近所に住んでいて、帯子に好意を寄せていた北畠に出会う。北畠は企業経営に2度失敗、妻子に背かれ、失意のうちにあった。晩秋の湖畔で傷つきあった2人は結ばれてゆく。

千歳から支笏湖畔に車を走らせた。舗装されたハイウェイが、原始林を縦断していた。ほかに走っている車がすくなくて、外国の道を走るような気がした。（略）原始林といったところで、本物の原始林はハイウェイからかなりはなれているらしかった。（略）

船はいまちょうど支笏湖の中央にさしかかっていた。恵庭岳、樽前山、モーラップ、これからのふたりの人生をながめるように見送っていた。

「ユニコーンの旅」　五木寛之　昭和46（１９７１）年　文藝春秋

フリーディレクターの火野昌吾は、紀行番組の撮影のため北海道に来ていた。病院前庭のポプラの列をカットに入れたかったが、精神科の患者たちの人権保護の立場から女医の江夏友子に拒否される。火野は美しい女医に惹かれ、近づいてゆく。患者の1人に自らをユニコーンと呼ぶ少年がいた。病に苦しむ少年は、ある日自ら命を絶った。

「ポプラ」は架空のものであり、病院は、支笏湖方面から火野の車が出て来たときに目にしたもので、支笏湖病院と思われる。

病院の建物とコの字の内庭、その庭にそって植えられたポプラの列。（略）彼はそのポプラが好きだった。（略）その下にぼんやり座ったり、動いたりしている奇妙におだやかな患者たちの姿が、彼の気持に砂地に水がしみるようにしみてきたのである。

「草のつるぎ」　野呂邦暢　昭和48（１９７３）年　文藝春秋『文學会』12月号

第1部は昭和49年、第70回芥川賞を受賞。佐世保相浦の第8新隊員教育隊での前期訓練の体験を綴った、野呂の青春記である。第2部「砦の冬」は千歳の野戦砲部隊での後期訓練を終え、一冬を過ごした主人公が自衛隊を辞めるまでの物語。配属されたのは１１７特科大隊。この部隊は昭和37年に富良野に移駐、平成17（２００５）年には廃止になっている。

主人公海東が千歳へ来たのは昭和32年の9月初め、陸上自衛隊が発足してまだ3年のことである。千歳駐屯地で彼等は5つの班に分けられ、3ヵ月間の後期教育を受ける。仲間には炭鉱夫、鋳物工、漁師、百姓など、それぞれ貧しかった。ブルドーザーやダンプカーの運転免許を取り、他の就職に役立てたいと考えている者もいた。海東にしても彼等と同じ八方塞がりの貧しさから這い上がるために、苦しい訓練に耐えているのだった。

やがて海東には別の意識が芽生えてくる。自分らしい好きな仕事がしたい。その思いは大きくなり、自衛隊を辞める決心をする。後に野呂は、自衛隊での生活は多くのことを学ばせてくれた自分にとっての大学であったと述べている。作中には触れていないが、作家になりたい夢を描き続けていたのではないかと想像する。昭和55年5月、野呂は急死、42歳であった。

小川を渡ればそこが千歳町だ。ぼくらは町を駆け抜け、青葉公園で休んだ。北東にぼくらが列車をおりた駅が見えた。公園から眺めたところでは町はさびれた鉱山町という雰囲気だ。（略）九州の田舎町とくらべたらどこかおかしい。人が住んでいる集落のように見えない。

町を二つに分けて川が流れている。映画館の裏手で折れるとその川にかかった橋に出る。木の欄干にもたれていると気が休まった。

「日曜日の白い雲」　原田康子　昭和53（1978）年　『北海道新聞』他

昭和53年7月7日から54年4月14日まで、北海道・東京・中部日本・西日本の各新聞社に連載したもの。主人公百合は元オーケストラのバイオリニスト。離婚の失意のうちに、母親が病院を営む岩見沢へ帰る途中、支笏湖丸駒温泉に一泊する。千歳経由で札幌へ出て、岩見沢へ帰る予定であった。千歳のバスターミナルで降りた百合は駅へ向かわず、繁華街をふらふらと歩き、「アラジン」というスナックが目に止まる。ウィスキーが飲みたくなって店に入った百合は、アラジンで働かせてほしいと願い出る。このまま岩見沢へ帰る気にはなれなかったのである。

アラジンの客、小中千博はF104Jのパイロット。2人は恋に落ちるが、百合は千博を結婚の相手にとは考えられなかった。軍医だった百合の父はルソン島から復員した後、戦争の体験を語ることなく世を去った。百合が千歳で暮らし始めてから、岩見沢の生家で父の日記が発見される。ルソン島での無残な日々が綴られていた。百合は千博が、戦闘機のパイロットであることが受け入れられなかった。やがて周囲の援助と理解に恵まれ、百合は札幌のオーケストラでバイオリン奏者に復帰する。

作中、百合は春日町のアパートに、千博は末広のアパートに住んでいる。全編を通して百合を取り巻く千歳の人々は終始温かく、百合の音楽への情熱を理解し、励ましている。失恋の小中千博もその一人だった。

アパートの道路の先は、ところどころに雑草が生い茂る空き地になっていて、その空き地の下に千歳川が流れている。川向こうにはやや小高い公園があって緑におおわれたこんもりした公園がのぞまれた。

民航機の爆音が耳につく。スクランブルの直後に、ゆっくりと誘導路へ移動し始めたトライスターの巨体が目に浮かぶ。あれこそは、千歳という町を象徴するなんとも奇妙な光景だった。

「熊撃ち」　吉村昭　昭和54（1979）年　筑摩書房

熊を撃つ猟師の話が7編収録されており、実話を元にした短編小説集である。千歳に纏わるものは「安彦」「菊次郎」「政一と栄次郎」の3編。

「安彦」　昭和48年8月28日の午後、事件は起こった。千歳市水明郷の王子製紙㈱千歳第一発電所の所員住宅のひとつから、70歳の女性が、午後3時頃、野苺を摘みに出かけたまま、午後6時を過ぎても帰らなかった。女性は羆に襲われたことが判明し、千歳市ヒグマ駆除対策本部に緊急出動が要請された。

部員の一人、多安（おお）彦が指揮をとり、熊撃ちに当たる。羆は射止められ、女性の惨たらしい遺体が発見された。

北海道千歳市の水明郷には王子製紙株式会社千歳第一発電所があり、所員の住宅が三十軒ほど軒をつらねている。近くには澄みきった水をたたえた千歳川が流れ、住宅の裏手五〇メートルほどの所には林がある。静かな風光の美しい土地であった。

「菊次郎」　昭和17年11月18日、千歳市蘭越地区3区にある村の3人の娘たちが万年草を採るために真町の奥の御料林に、別れ別れに入っていった。夕方になっても19歳の娘だけが戻らなかった。行方不明から4日後の23日、

遂に娘の無残な遺体を発見する。

村の人々は、元猟師で今は村役場の木材伐採人の小山田菊次郎に熊撃ちを依頼する。

菊次郎、今泉吉之助はじめ３人の熊撃ちの名手と５匹のアイヌ犬によって羆は射殺された。

その村は、アイヌの住むコタンで、近くに千歳川が流れている。川には鱒、赤腹、ヤマベ、イワナ、ウグイなどが群れ、山に入ればさまざまな山菜やキノコ類が採れる。村は自然の産物に恵まれていた。

「政一と栄次郎」　昭和35年10月、千歳市のはずれにある蘭越地区の姉崎政一の家に中年の女が訪ねてきた。羆が出るので茸採りにも行けない。退治してほしいと言う。茸は人々にとっての収入源であった。

政一は14歳の春から山に入った。村には熊撃ちの名手、小山田菊次郎、今泉吉之助がいた。政一は彼らの後につき従って、羆を仕留める情景を見てきた。政一は30歳を越えた頃から小山田菊次郎の後について山に入り、銃の操作を教えられたが、まだ自分の銃で仕留めたことがなかった。

栄次郎は小山田菊次郎の三男で同じ猟友会の仲間だった。２人で羆を退治しようと山に入るが、羆に襲われそうになったものの、射止めることはできず、命からがら逃げ帰った。

３年後、２人は栄次郎の父、菊次郎と共に熊撃ちに山へ入った。見事熊撃ちに成功し、解体した肉は村人たちで食した。毛皮と胆嚢は業者の手で買い取られた。

北海道千歳市のはずれにある蘭越地区には、すでに秋色もうすらぎ気温は日増しに低下していた。（略）その季節になるとこれと言って産物にも恵まれぬ村では近くの山々に分け入って茸採りをする者が多かった。茸を買い集める業者が巡回してくるので、かなりの収入になる。人々は早朝から籠を背負って山中に消えた。

「沿線有情」〈千歳線〉　小松茂　昭和54（１９７９）年

さっぽろ文庫⑪「札幌の駅」に収録　札幌市教育委員会編

苫小牧から札幌へ帰る私は、その日「札幌行」の普通列車に乗った。私が20代の頃、実家が苫小牧にあったため、よく千歳線を利用した。

植苗、美々、千歳、恵庭、と札幌までの各駅に纏わる思い出のエピソードが温かい筆致で書かれている。

朝鮮動乱が始まった頃、私は２年程千歳に住んでいた。街はアメリカ兵が溢れ、戦闘機が低空飛行した時代。千歳線の実権は米軍の手に移り、「駐臨」何号と呼ばれる専用列車が轟音とともに駆け抜けていた。土、日曜には米軍相手の女性が旭川、小樽方面から列車に乗ってやって来る。月曜の朝、彼女たちは列車に乗って帰っていく。

この頃から千歳線は道内での主要な幹線の一部になっていた。

街はアメリカ兵のスラングの飛び交う原色の街と化し、街自体が狂ったように厚ぼったい化粧の手を休めず。米兵相手の商売に狂奔して（略）日本人が何かをして食いつないで行かねばならない時代だった。

「鮭を見に」　内海隆一郎　平成５（１９９３）年　講談社

62歳になる村井は10月半ば、長い間思い続けてきた北海道へ初めて旅立った。村井夫婦に子供はいなかった。村井の乗った寝台車の通路で、10歳くらいの女の子に出会う。鮭の遡上を見る地はまず、長い間心に突き刺さっていた函館だった。函館駅で、列車にいた女の子、聖子に再会。仙台から無賃乗車し、札幌のおばさんに会いに行くという。従いてくる女の子を連れ、トラピスト修道院へ行く途中のモヘジ川へ行くが、思ったほどの

鮭は見られなかった。村井は函館市役所を訪ね、八重樫里子の住所を調べる。昭和44（１９６９）年に苫小牧へ転出していた。かつて4年間里子と暮らした。その間に2度子供を堕した。好きに生きたかった村井は結婚を拒んだ。里子は昭和31年、2度目の堕胎の直後、函館へ帰った。鮭の遡上の話は里子から何度も聞いたのだった。札幌へ女の子を送る途中、村井は千歳川のインディアン水車の鮭の捕獲を見ようと立ち寄る。そこでも里子から聞いた光景は見られなかった。村井は女の子を伴って苫小牧へ。駅に連なるデパートで「八重樫里子遺作展」の垂れ幕を見る。里子は前年秋に亡くなっていた。そこで会った一人の青年は村井の息子と知ったが、父親と打ち明けることはできなかった。女の子が訪ねる札幌のおばさんは、行方の知れない、その子の父親の元愛人だった。それから村井は女の子を伴って、知床方面へ鮭の遡上を見に行こうと決意する。

村井と女の子は駅を出て、タクシー乗り場に急いだ。（略）タクシーが着いたところは、千歳川の岸辺だった。広い駐車場があって、観光バスが二台停っていた。縁日の屋台のような土産物店が軒を並べていて、鮭の燻製を売っていた。赤黒くひからびた鮭が店先にたくさん吊るしてあった。

タクシーの運転手が村井に説明してくれたところによると、ここの観光の目玉はインディアン水車であるという。

「柔らかな頬」　桐野夏生　平成11（１９９９）年　講談社

平成11年7月、直木賞受賞作品。支笏湖の、石山洋平の別荘に家族で来ていた森脇道弘の長女、有香が行方不明になる。母親の森脇カスミは北海道、留萌郡喜来村の出身。製版業の夫道弘を支え、長女の有香、次女の梨沙の2人の子供がいる。カスミはデザイナーを志望し、高校卒業と同時に家出。夢を果たせず、森脇の会社で働き、道弘と結婚する。モリワキ製版は石山洋平の会社の下請けで、石山の仕事を一手に引き受けていた。モリワキ製版をたびたび訪れていた石山はカスミに惹かれ、ほどなく2人は男女の関係になる。石山は支笏湖の別荘を買い、そこでカスミとの逢瀬を計画する。疑われないためにまず両家族で夏の休暇を過ごすことにした。カスミと石山が別荘の納屋で密かに逢った翌日、長女の有香が散歩に出たまま帰らなかった。現場は別荘地の一番奥。警察の捜索のかいもなく年月が経っていく。石山は責任を感じ、会社も不振となり妻と離婚。カスミも道弘と離婚し、有香を捜す日々が続いた。当時道警の刑事で、現在は胃癌になり退職した、余命1年の内海という青年が有香を捜そうと動き出す。内海は苫小牧勤務の頃、大きな事件が起きて解決すれば出世できると考えていたことを恥じ、有香は自分が殺したようなものと苦しむ。森脇夫妻も石山も内海と同じことを考え苦しんでいた。有香は見つからないままである。

八月十一日朝、支笏湖町泉郷の石山洋平さん宅から、製版業森脇道弘さん（四十四歳）の長女、保育園児の有香ちゃん（五歳）が、散歩に出たまま帰らないという一一〇番通報があった。（略）森脇さんは東京在住で、夏休みを利用して一家で友人の石山さんの別荘に遊びに来ていた。

現場は標高五百メートルの別荘地。傾斜地で五歳の幼児ではそう遠くに行けないと見て、捜索隊は警察犬五頭を投入し…。（作品冒頭の新聞記事を引用）